

さやまの絵本



作者 池原昭治さんに聞く

平成7年4月から16年9か月にわたり連載してきました「さやまの絵本」が本年1月号の第200話をもって終了しました。「さやまの絵本」は、狭山市にまつわるさまざまな話を親しみやすい文章と独自の画風で描き出し、多くのファンに愛されたコーナーでした。今回は、池原さんにお話を伺いながら、その絵の魅力を探りました。

池原昭治さんのプロフィール

香川県高松市生まれ・狭山市水野在住

童絵作家・日本漫画家協会会員・高松短期大学客員教授

日本各地の民話を訪ね歩き、「童絵」という独自の画風を確立。観音霊場や祭りに関する多くの著書がある。

1963年 東映アニメーション入社

1982年 この年より、テレビ「まんが日本昔ばなし」の原作、演出、作画、美術に参加

1985年 『狭山市史』民俗編執筆刊行

1994年 環境庁(現環境省)『環境月間ポスター』製作担当

2000年 高松市「花樹海」内に「池原昭治童画館」設立

2005年 狭山市立博物館 秋期企画展『池原昭治 童絵の世界展』開催

2011年 『狭山市観光大使』に任命



独自の画風とお話

狭山市とのかかわり

狭山市に住んで40年以上になります。独身時代は、練馬に住んでいて、結婚したときに狭山に来たのですが、そのころ家の周りは、まさに国木田独歩の世界で、頭上では野鳥がさえずり、足元では野うさぎが走っていました。

こちらに来て、まず四国と空気が似ているなと感じました。狭山の空の青さと四季折々の雑木林の変化。そして、人間川で夕日に浮かぶ富士山を見て感動しました。いいところに来てよかったなあと思いました。

「童絵」の画風

私は、山登りが好きで、よく丹沢へ行っていました。毎週のように行き、1年に50回くらい登ったこともあります。



そのとき、10軒ほどあった山小屋の中で、初めて絵の展示会を開催しました。テーマは山にまつわる民話で、山で知った民話を集めて絵を描いたのですが、私の場合は、漫画的な感じのキャラクターが登場しました。今の画風は、そのころに出来上がったものだと思います。

「まんが日本昔ばなし」について

東映アニメーションを10年で辞め、その後、テレビ「まんが日本昔ばなし」の制作に参加しました。私の代表作は、きつねがわらったです。そのとき、「狭山の絵本」昭和53年・狭山市刊の中より3話ほどがまんが日本昔ばなし」によって全国に紹介されました。

・諏訪神社のなすつつかえ(人間川)

なすを食べた竜神がおとなしくなったところから、自分の畑で取れたなすを奉納する代わりに、神前のなすをいただいで食べる奇祭・信立寺の鬼子母神(広瀬)

鬼子母神が心を改め、善神として子ども達を守る子育ての神さまになった狭山独特の話

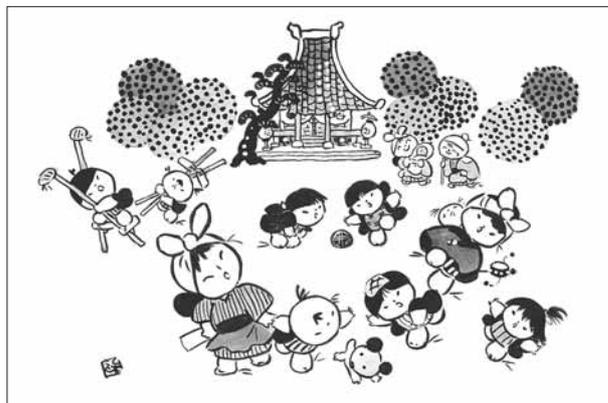
・大六天様(柏原)

ちらかしていることを好む神様といわれ、地元ではちらかしさ「ま」で通っている。

「広報さやまの絵本」

200話を終えて

広報さやまで連載させてもらって、200回も続けることができ、たのは、ひとえに読者の皆さんや取材のとき、快く語ってくださいました古老の方、誤字・脱字をいねいに編集していただいた広報課の人たちのおかげです。



平成19年3月号(第142話)
広瀬のキシモジンさま

大六天さま



平成20年8月号(第159話)
お諏訪さまのなすとっかえ

田中のカンカン地藏さま

新連載への思い

200話というのは、それだけこのまちに描くものがあるということだと思えます。狭山には、観光的な資源がないとか、見るものが少ないという方もいますが、素材はたくさんあると思えます。その素材を生かすのは、それを見る方聞く方の責任です。私はその素材を提供する仕事をやっているのではないかと考えています。

印象に残っている話
入曾の水野に伝わる「ネトトコ、へコ」の話をしたとき、年齢を問わず、大人も子どももいっしょになって笑ってくれたことがとてもうれしかったですね。「田中のカンカン地藏さま」の話も大変人気がありました。話の場所に行ってみたいという声を聞く制作中の苦労も飛んでしまいます。

今度は、私の視点でとらえた残したい狭山の風景を描きたいと考えています。狭山らしい景観を訪ね、桜、紅葉、川、林…と、四季折々の美しい風景を童絵風に表し、皆さんが興味を持って、問い合わせが来るような場所を紹介できればと思っています。

問合せ広報課へ内線7162